

空手道詳説（16）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その3. 第二尚氏王統の誕生）

(8) 尚真王の治世と禁武政策

第二尚氏王統初代王尚円の子である尚真王（1465～1527年、在位：1477～1527年）は、1477年数え年13歳で第二尚氏第3代王となった。以降、50年（足掛け51年）という長きにわたり王として君臨したので、これは第二尚氏王統の中で最長記録である。

若年で即位したせいもあって、当時33歳だった母後の宇喜也嘉（おきやか、1445



尚真王絵図

～1505年）は、王を助けるのでなく、自ら実権を握り、ほしいままに政治の表舞台に立つという強権振りを発揮した。それを憂う人あっても、粛清を恐れて黙する他なかったようである。

しかし、尚真王は何時までも母後の言いなりになっていた訳でない。次第に英邁な人間として成人し、政治面に自らの意思を反映するようになった。

治世の重点としたのは、琉球王国の旧弊を排して新たな国造りを目指し、国家の長期安定を心掛けたのである。それを証拠づけるものとして、1509年

首里城正殿前の橋の欄干に記された「百浦添欄干之銘」がある。

銘には、尚真王の業績を讃える11項目が記されており、主な事項としては、八重山の反乱を抑え属島支配の強化、冠（はちまち）の色や簪（かんざし）によって身分の貴賤上下を定め、仏教に厚く帰依し寺院を建立、租税の軽減、按司の武器撤収、按司とその家族を首里に住まわせ、神女組織の政治機構への組み

入れ、玉陵（タマウドゥン）陵墓の建設、殉死の禁止、明国への入貢回数を増やし流通の活発化など、何れも時代の先を行く改革と中央集権化であった。

新里恵二氏の著書「沖縄史を考える」41頁から引用するならば、

尚真以前を、分権的封建制とよび、尚真以後を集権的封建制とよんでいる方があります。たとえば島袋全発氏は、「沖縄略史」で、尚真の中央集権について「徳川幕府のいわゆる集権的封建制度の確立より一世紀以上も前にこれを行ったのである」と論じられています。

とあることから、尚真が標榜した政策の概要を読みとることができます。

第二尚氏王統初代の尚円は、記録に拠れば、「人柄がよく民衆に推されて王位に着いた」となっているが、実際には、計画的なクーデターによって王権交替を成した訳で、尚円の周りには何時も血生臭い噂が絶えなかったのに比べ、尚真の治世中は、父母の轍を踏むまいとする意志がある。加えて、第二尚氏王統の長期安定維持に向け、礎石の構築に腐心したと伺い見ることができます。

その足跡から、王府の権限拡大と封建制への移行は、諸制度の制定に繋がり、按司たちの反抗手段を閉じる施策ばかりか、民の暮らし向きへの視点も忘れていようだ。

以下について、その主だった政策について説明を加える。

ア 統治領土の拡大

宮古や八重山など、琉球列島の南方に位置する島々は、察度王統時代の1390年頃から、中山王との間に朝貢関係を持つようになったが、その関係は緩やかなものであった。

尚真王の時代になり、その統制強化が行われたので、これに反発した八重山の頭領アカハチは、3年間も貢納を拒否したばかりか、近隣する宮古、西表、波照間などの島々に攻め入る兆候が出てきたため、危険を感じた島の按司たちが王府に訴え出た。報告を聞いた尚真王は、1500年3月に軍船46隻に3000人の兵士を分乗させ那覇港を出港、途中で宮古に立ち寄って、八重山頭職で石垣島按司の長田代主に案内され、八重山島に到達した。

アカハチの率いる兵士と、住民が一体となった激しい抵抗に遭いながら、7日間に及ぶ激戦の末、漸くアカハチを殺害し、一族郎党ことごとく撃ち果たして勝利した。この戦いを後に「アカハチの乱」と呼んだ。



宮古・大浜にあるアカハチ像

この戦いにおいて、王府側船団の航海術は未だ未熟で、周辺島々の地理に精通していたとは思えず、石垣、宮古、西表の按司と兵士たちの協力がなかったら、この征伐に勝利どころか、八重山島にさえ到達できなかったのではと、後年の推測がある。

1522年には与那国島や久米島も服従させた尚真は、今でいう先島諸島に及ぶ広大な領域を支配下の治め、琉球王国の最盛期を現出するなど、統治領土の拡大と王権の安定強化を果たした。

ただ、先島に対する貢税制による負担は、極めて異常と思われるほどの苛酷さであったと伝わる。その収奪は、一層島民の貧困と生産力の低下を招く原因となった。

イ 玉陵の建造

尚真王は、第二尚氏初代王の尚円を祀るため、墓陵の造営に着手した。尚真の少年期に没した最も尊敬する父王のため、そして第二尚氏王統の威厳を万民に知らしめるのが目的であった。それとともに、(7)「尚円王を取り巻く歴史の虚実」の中で母后・宇喜也嘉の行状について触れとおり、何事も先に立ちたい宇喜也嘉が強く建造を望み、王を差し置いて指図したと言われている。

1501年、王家の陵（みささぎ）は完成し、玉陵（タマウドウン）と名付けられた。玉陵は、沖縄県那覇市首里金城町にあって、第二尚氏王家歴代の国王が葬られ、造りは中室、東室、西室と3つの建造物に分かれている。

先ず中室だが、当時琉球国の葬制によって、葬儀後の遺骸は骨になるまで放置し、数年後に骨を取り出して洗骨する場とした。洗骨した後の遺骨は、骨壺に収めるのが習わしとなっている。

東室は、王及びその妃の骨壺が、西室には、王及び王妃以外の王族の骨壺が納められた。

残念ながら、太平洋戦争末期に、玉陵は日本軍総司令部に近かったため、首里城と共に集中砲撃に遭い、東室・西室が破壊されるという大きな戦禍を被った。現在見られる大部分は、大戦後に復元されたもので、右の写真は、大戦による砲撃で破壊した玉陵である。



この玉陵には、被葬者の資格を記した碑、いわゆる「玉陵の碑文」がある。この碑文は、当時としては珍しい仮名書きで記されている。

何故この碑が造られたのか。そこには尚真王の深慮するところがあった。父が築いた王朝を守るため、母の犯した様々な行為が、今後の王権にダメージを与えるようでは

いけない。もしあったとしても、それを最小限に食い止めなければならない。悩んだ末の結論は、宇喜也嘉の名で碑文を書かせることであった。

尚円王亡き後に宇喜也嘉が生んだ異父弟妹らは、何ら王家と関わりない人間であると認めさせるためと言える。

この頃既に、尚真は母の犯した陰謀の数々は粗方察していたに違いない。

更に、成人した尚真は自ら望んで、宇喜也嘉が大嫌いだった亡き叔父・先代宣威王の長女・居仁（生没年不詳）を妃に迎えており、宇喜也嘉は、これが特に気に入らなかったようである。

従兄弟同士である二人の間に生れた長男の朝満（尚維衡、1494～1540年）は、一旦世子となるものの、宇喜也嘉が難ぐせ（尚宣威と血が繋がるのを嫌う）付けて廃嫡に追いやり、それ故、朝満の名は碑文に記載されなかった。

玉陵に埋葬される有資格者とは、尚真王、宇喜也嘉、尚真王の妹、尚真王の長女、二男の尚清（世子）、他に三男から七男までとなっている。添書きとして、呪い文があつて、

『この子孫は、千年万年に至るまで、このところにおさまるべし。もしのちに、あらそふ人あらハ、このすミ見るべし。こんかきつけそむく人あらハ、てんにあをき、ちにふしてたたるへし』（原文のまま）と。

日付は大明弘治十四年（1501年）九月大吉日となっている。

建造後程なく、崩御後に見上森に葬られていた初代尚円王の遺骨は、玉陵に改葬された。

宇喜也嘉は玉陵が建造されて4年後の1595年に60歳で没した。次の経緯から、尚真王は宇喜也嘉を玉陵に葬らないと断を下した。それは王族として扱わないことを意味する。没するまで気位高く虚勢を張っていた宇喜也嘉に、最も堪え難い罰を与えたのであつた。



玉陵の碑と碑文（沖縄県有形文化財）

宇喜也嘉が死んだ直後に、尚真王は今まで気付かなかつた、恐ろしい事実を重臣の一人から知らされた。宇喜也嘉が、尚円王糟糠の夫人とその子供達を暗殺したことだつた。

母、宇喜也嘉の重大犯罪を知った尚真王は、この行為は許されない、王として断罪しなければならない。ただ表沙汰にすれば第二尚氏王統にとって大きな傷を残し、自身の王位継続にもダメージを与えかねない。この事件は、公表すべきではないと尚真王は臣下に言い含め、自身も真実を胸の奥深く仕舞い込むことにした。

だが、これまで度重なる父尚円王への裏切りに対して、厳しく罰しなければならないと決意を固めた。

如何様に考えても、生母であろうとも宇喜也嘉の行為を許すことはできない。

死後は王族として扱わず、首里石嶺と浦添の境界線に墓地を造り埋葬したのであった。

その地は前田ムイ（盛）と呼ばれ、地元住民の墓が点在する寂しい所である。一角には、王族の墓があるという密かな言い伝えが残され、それを「宇喜也嘉ムイ」と呼び習わしてきたという。

500年余り経過した今、宇喜也嘉を葬った墓地は跡形もなく、王家の墓所だったことを示すものは何一つ残っていない。

尚真王が崩御し、1527年に第4代王となった尚清（1497～1555年、在位：1527～55年）は、即位後は「玉陵の碑文」の書き付けなど、全く意に介さなかった。

一度信を失い、王族から外ずされた祖母が残した書き付けより、父尚真が下した断が心中深く焼き付いていたに相違ない。

尚清は、廃嫡となった長兄朝満の死後、早やかに玉陵に葬り、また、碑文に記された各王子の子孫は玉陵には入れず、それぞれ各家に墓所を造らせ葬らせている。

したがって、尚清の即位後は、玉陵に葬られているのは、朝満のような例外を除く歴代王と王妃であると思ってよい。

尚清王もまた尚真王に似て、急進的な人柄だったようである。

しかし、歴史は動くのである。尚真王の後を第4代尚清王（1497～1555年、在位：1527～55年）が、次いで第5代尚元王（1528～72年、在位：1556～72年）、第6代尚永王（1559～89年、在位1573～89年）と続くが、尚永王が30歳で亡くなった時、男子はなかった。尚永王の長女・阿応理屋恵按司加那志（生年不詳～1663年）が婿を迎えることになり、選ばれたのは、宇喜也嘉が法外に毛嫌いした朝満（尚維衡）の孫、与那城王子朝賢の長男で童名は思徳金で、尚真王からは曾孫になる。思徳金は尚永王の崩御後、第7代尚寧王（1564～1620年、在位：1589～1620年）となったので、遡れば第2代尚宣威王の玄孫（やしゃご）となるが、尚円王、そして尚真王と繋がる直系の子孫を婿を選んだことになる。

尚寧王統治中の1609年（慶長14年）、薩摩藩による琉球侵攻という大事件に巻き込まれ、悲運の王となったのである。

1931年、尚家20代当主尚典の夫人祥子が葬られて以降、新たな被葬者はいない。

玉陵一帯は、2000年に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。他に全体が国の史跡、「玉陵5棟」（墓室3棟、石牆2棟）が国の重要文化財（建造物）に、「石彫獅子」と「玉陵碑」が県の有形文化財（彫刻）に指定されている。



玉 陵 の 全 景

(この項、続く)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行